

佛蘭西書巡覧 4

平山 弓月

なにもかも、古書が悪いのだ。だが、それでも……
子供より古書が大事と思いたい。

鹿島茂



19世紀フランス文化に関して、精力的に筆を揮っている鹿島茂は、家族4人で小さな車を駆ってのフランス旅行の途上、ある古書に出逢い、欣喜雀躍として買い込みます。しかし、その古書は全17巻で、総重量75キロに及びもので、車に積み込むと、本来子供が座る後部座席の半分以上を占領し、仕方なく一人は夫人の膝の上で助手席に乗り、もう一人は後部座席に置いた古書の上に座るはめになったのです。家族に不自由を強いてまで古書を衝動的に買った顛末を綴ったエッセーの結語が、上に引いた、居直りとも思える言葉なのです。

彼が家族の不自由をもものともせずに買い込んだのは、今回紹介する、一般に『19世紀ラルース』と言う名で呼び習わされている百科事典でした。

この事典の正式名称は、**Le Grand Dictionnaire universel du XIX^e siècle**で、日本語に訳すと『19世紀萬有大事典』とでもなるものです。18世紀の啓蒙思想家のディドロやダランベールによって完成された『百科全書』（この書については稿を改めて紹介します）の、「より完全でさらに一層壮大な対をなすもの」と、19世紀の大詩人ヴィクトール・ユゴーVictor Hugo(1802-1885)に賞賛された記念碑的な大著作です。

ブルゴーニュの片田舎で生まれた著者のピエール・ラルース Pierre Larousse(1817-1875)は、幼少期から利発で、ディドロのような百科全書家encyclopedisteになる夢を持ち、16歳で奨学金を得てヴェルサイユで高等教育を受けました。その後故郷に戻り、3年間小学校の教師をつとめました。1840年には夢の実現を目指してパリにやってきました。8年もの間ラルースは、ソルボンヌや他の教育機関に通い、さらには大きな図書館に出入りして、さまざまな言語を始めとして、文学・哲学・天文学など多くの学問を身につけました。この時代の刻苦勉強の日々が、後に大きく結実するのです。

1850年に出版社を起こした彼は、教育関係の書物を次々と世に送り出しました。そして満を持していたかのように、64年から67年に分冊の形態で『19世紀ラルース』を出版し、彼の死までの11年をかけて22,700ページに及び17巻を書き上げたのです。

「あらゆることに関して、あらゆる人に知らしめる」をモットーとして創られたこの著作は、通り一遍のものではありませんでした。彼自身の鋭い批評眼が、多くの項目に輝いています。例えば、「フランス共和国の将軍ボナパルトは、1769年8月15日コルシカ島のアジャックシオに生まれ、唯一にして不可分のフランス共和国暦8年ブリュンメール18日（1799年9月9日）に死す」と記しています。フランスの皇帝となったナポレオン一世を「陰謀ののち最高権力を強奪したもの」として、あたかも二重人格者のように切り捨ててしまいます。フランス大革命の「申し子」としてのナポレオンを認めはしても、共和政を潰えさせたナポレオンは……と言うような辛辣な記述が随所に読まれるのです。著者の思いを全面に出した事典は、現在ではもうまったく見られなくなってしまいました。そういう意味で、『19世紀ラルース』は、19世紀のフランスを理解する、「時代を生き活きと映し出し」、「スナップショットのように時代を切り取った」もので、21世紀の現代でも十分読むに堪えるものとして生き続けているのです。

ひらやま ゆづき (教授・フランス語・フランス文化論)